

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03276

研究課題名（和文）モンゴル牧畜社会におけるブリコラージュの研究

研究課題名（英文）Studies on Bricolage Practices in Mongolian Pastoral Society

研究代表者

上村 明（Kamimura, Akira）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員

研究者番号：90376830

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、モノや人との具体的な相互作用に着目する本来のブリコラージュ概念を用い、ヤギの搾乳について、牧畜技術の重層性と、実践されている牧畜技術が閉じた系ではなく様々な断片を持ち、そのことによって環境の変化を受け入れ、生態的・生物学的・社会的関係を織りなし生成・変化してゆく動態を明らかにし、不確実で時間的及び空間的に変動のおおきい自然環境に対応するため構築されるエスニックな境界を越えた安定的な協力関係について、また、インターネットの普及とそれに伴うインターネット上のコンテンツのコモンズ化が、現在のヒップホップの受容と制作のあり方に決定的に作用していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、モンゴル社会において様々な場面で観察されるブリコラージュ的实践の動態を明らかにすることによって、生業がいかに社会・文化を規定するか解き明かそうとする。これは、多くの研究者が直観的に肯定しているも、ナイーブな議論になってしまうと敬遠してきたテーマである。ブリコラージュ的諸実践を横断的に考察することによって、ブリコラージュ的实践である牧畜の機会主義的移動が、牧畜以外の実践に反映し、社会のあり方全体を規定している有様が解明される。そして、自然と社会の二元論を越え、いかにして生業と文化との関係が説明可能かという問題の解明、さらに日常的実践の理論の再検討につながる。

研究成果の概要（英文）：This study, using the original concept of bricolage, which focuses on concrete interactions between things and people, clarified (1) the multi-layered nature of goat milking as a dynamics of the pastoral technology, which has various fragments rather than a closed system, to adapt environmental changes, weaves ecological, biological, and social relationships, and generates and changes them, and (2) the stable cooperative relationships across ethnic boundaries that are established to cope with uncertain and spatially and temporally variable natural environments, and (3) how the spread of the internet and the subsequent commodification of content on the internet have influenced the current acceptance and production of the Mongolian hip-hop.

研究分野：文化人類学

キーワード：ブリコラージュ アフォードانس 牧畜 モンゴル 搾乳 ヒップホップ

## 1. 研究開始当初の背景

日本におけるこれまでの代表的なプリコラージュ研究は、小田亮(1996)のように、セルトーの議論にもとづき、日常実践としてのプリコラージュを「植民地化された生活世界を生き抜く」抵抗の「戦術」として論じてきた。このような、むしろ古典的な「主体」を想定させる「語り」は、アクターネットワーク理論(ANT)以降の今日では受け入れられなくなっていると言ってよい。また、その議論のなかで、プリコラージュは、日常実践そのものに一般化され、エンジニアとプリコルールの相違や社会による差異は、権力関係の文脈のなかに溶解してしまう。

しかし、この相違は、Lévi-Strauss (1962)が言うように「現実に存在」し、「未開社会」を持ちださないまでも、社会によってプリコラージュの「強度」は異なるのではないだろうか？

こう考えるようになったのは、モンゴルで「モンゴルチロフ」という言葉をよく耳にするからである。直訳すれば「モンゴル化する」、近代的なモノやコトを「モンゴルの固有の文脈に適合させる」という意味であるが、実質的には「手元の(本来その目的でない)材料を用いて、必要なモノを作り、問題を解決する」意味で用いられ、Lévi-Strauss (1962)のプリコラージュと重なる。そして、プリコラージュ的志向は、牧畜という生業を越えて様々な場面で観察され、モンゴル社会を規定する特性であると考えられる。ちなみに、プリコラージュを「モンゴル化する」と表現することには、前近代と近代のハイブリッドなモンゴルの状況をもたらすアイロニカルな自己意識が反映している。そこには、近代化に「遅れた」モンゴルというマイナスの自己評価と、機知や機転に優れた野生人＝モンゴル人というプラスの自己意識が交錯しているのである。

モンゴルを対象にしたプリコラージュ的实践という観点からの研究は少ない。Upton(2009)は、土地(牧草地)改革における国家の介入と慣習的権利と実践との間の動的な相互作用を Cleaver(2002)の“institutional bricolage”という概念で読み解こうとした。日本では、滝口(2013)が都市居住地に対する入り組んだ権利関係を「つぎはぎの所有」と表現し、風戸(2015)は、移動式住居ゲルの可変性をモンゴル人の「機会主義的」な生き方の現れと評価した。これらの研究で記述されている実践は、プリコラージュと呼んでよく、しかもそれを多少ともモンゴル社会に特質的な性質として位置づける。これは上述のとおりモンゴル人自身の自己意識とも重なる。

モンゴル社会がプリコラージュの「強度」がたかい社会ということ認めれば、では、なぜそうなのかという問題がつぎに出てくる。

まず考えられるのが、移動牧畜という生業による説明であろう。もちろん、単純な因果関係や下部構造・上部構造によって説明することはできない。松井(2011)は、「生業のエートス」という考え方によって、生業と文化を結びつけようとした。生業は、ブルデューの「構造化される構造」としてのハビトゥスと見なされる。そして、「生業の視点からみたとき」、「遊牧をする人たちの社会の編成から嗜好までが、遊牧という彼らの生活のデザインと不離のかたちになっていることがはっきりとする」という。このように、生業の「移動性」と文化の「柔軟性」の結びつきが示唆されてはいるが、実際にどう結びつくのか、その論理は明らかでない。また、多様な文脈がからみあって実践が行われるという観点に欠け、「生業のエートス」と生業の外部との関係もつまびらかにされていない。

### プリコラージュの再定義

本研究では、プリコラージュを、「新規の課題を解決するため環境がアフォードする性質を利用すること」と仮に定義する。モノづくりを出発点に考えると、プリコルールが手元にある材料のアフォードする性質を利用するように、移動牧畜民は生態環境がアフォードする性質を利用する(cf. 北村 2007)。そして、プリコルールが限られた一群の道具材料と「対話し」(Lévi-Strauss (1962);これはアフォードンス理論の核心部分を言いあてている。また、ANTとも親和性がある) 取捨選択するように、牧畜民は環境と対話し、移動によって牧草地を選択する。プリコラージュが成功するかは、プリコルールの新たな組み合わせを考えつく能力にかかっており、牧畜において、それは環境に適応する機会主義的な能力そのものである。上のように定義すれば、生態環境は社会環境にもたやすく拡張でき、様々な実践を共通の枠組みで横断的に考察することができる。それによって、牧畜における機会主義的移動が、多様な場面での日常実践と、相同性によって、人・モノ・空間・記憶等を経路とし、呼応し共鳴しあっていることが明らかになるはずである。

## 2. 研究の目的

本研究は、モンゴル社会におけるプリコラージュ的实践の動態を明らかにすることによって、生業がいかに社会・文化を規定するか解き明かそうとする。モンゴル社会には、自分たちをプリコルールとみなす自己意識が存在し、プリコラージュ的实践が様々な場面で観察される。これら実践を横断的に考察することによって、牧畜におけるプリコラージュといえる機会主義的移動が、それら実践に反映することを通して、牧畜という生業が社会のあり方全体を規定している有様を解明する。それによって、(1) 自然と社会の二元論を越え、いかに生業と文化との関係が説明可能かという問題を考え、(2) 日常実践の理論を再検討し、(3) 牧畜をめぐる経済合理主義的な開発言説を批判する経験的な枠組みを提示することを目指す。

### 3. 研究の方法

本研究の調査は、まず牧畜地域における、生態資源利用と社会資源利用を対象とし、さらに郡センターなどの定住地や地方都市、そして首都ウランバートルと範囲を広げていく。

(A)不確実性の高い生態資源がどう利用されているか、また生態資源利用を通じてどのように社会ネットワークが構成されてゆくかというこれまでの研究に基づき、牧畜民が生態と社会をふくめた自分の環境からアフォードされる性質をどのように資源に変え利用するのか明らかにする。

(B)モンゴル社会において、プリコラージュ的实践と見なしうる実践には、どのようなものがあるか明らかにするとともに、それら実践が牧畜と関連づけられる根拠となる相同性あるいはパターンとはどのようなものであるかをそれぞれの実践の場において記述し明らかにする。

(C)モンゴル人自身が「モンゴルチロフ」と認識する実践には、どのようなものがあるか？その用法の範囲を明らかにする。とくに、近代的なモノやコトを「モンゴルの固有の文脈に適合させる」という文脈に注目する。

(D)モンゴル社会においてプリコラージュの能力を称揚し強化するシステムはあるのか？それは、牧畜という生業と結びつけられているのか？それが言説としてどう構成され作用しているのか明らかにする。また、プリコラージュ、「モンゴルチロフ」の負の評価についても明らかにする。

### 4. 研究成果

(1)西モンゴルの調査地でヤギの搾乳についての参与調査を行い、家畜の命名や呼びかけ、群の編成といった個々の技術が、その時々々の自然環境や世帯の社会的条件によって、総体としての搾乳作業として織りなされていく過程を観察した。また、実際に見えている顕在化した作業の向こうに、潜在的な技術のバリエーションの蓄積が広がっており、現在通常使われることのなくなった技術がある事情で使われたり、まったく別個の形態に見える技術が深いレベルで共通性と置換可能性をもっていたりすることを明らかにした。

(2)モンゴル人とカザフ人とのエスニックな境界を越えた個人的な友人関係が、気候的な要因をはじめとする諸要因によって、いかに構築されているか明らかにした。そして、その共生原理を、統合による同化や隔離とは異なる、離接的総合と性格づけた。

(3)ヒップホップの社会批判的要素とエスノ・ミュージックの観点から考察し、韻文の伝統を受け継ぐだけでなく、今日英雄叙事詩がヒップホップとして歌われている現象を明らかにした。また、モンゴル・ヒップホップの生産性がインターネット上のコモンズの存在に支えられていることを明らかにした。

(4)モンゴル伝統文化のハイブリッド性を、ネット上のダンスチャレンジを通して解明した。2020年、ナーダム開催式は、コロナ・パンデミックにより、録画されたクリップをテレビで放映することで代替された。それによって、伝統舞踊の実践がダンスチャレンジとなってネットを通じて世界中のモンゴル人に広まった。今、その反動としてリアルな民族フェスティバルがさかんに行われるようになった。この現象の記述によって、文化におけるハイブリッド性と活力との関係を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 上村明	4. 巻 33-1
2. 論文標題 モンゴルの移動牧畜 過去10年間の変化から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 沙漠研究	6. 最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14976/jals.33.1_67	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kamimura Akira	4. 巻 -
2. 論文標題 "Belcheer ezemshuuleh" tuhai onol ba praktik	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Mongolyn ugsaatan sudlal-2020: Erdem shinjilgeenii hurlyn emhetgel	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 上村明	4. 巻 21-1
2. 論文標題 家畜は境界を越える モンゴル国西部におけるエスニック集団の共生原理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 上村明	4. 巻 24
2. 論文標題 エスニック境界を越える牧畜民の協力: モンゴル国西部のオリアンハイ人とカザフ人の事例から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 生態人類学会ニューズレター	6. 最初と最後の頁 76-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 上村明	4. 巻 -
2. 論文標題 アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩：モンゴル文化におけるその位置	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ユーラシア草原を生きるモンゴル英雄叙事詩』三元社	6. 最初と最後の頁 137-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上村明	4. 巻 82-1
2. 論文標題 適応する「主体」 モンゴル国牧畜民の世帯構成から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 14-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.82.1_014	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 KAMIMURA, Akira	4. 巻 2
2. 論文標題 Mongolyn Hoshuu Nutgiin Zurgiin Huvisal, Dursleliin Uurchilt	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Mongol Sudlal ba Togtvortoi Hugjil	6. 最初と最後の頁 61-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上村明	4. 巻 3
2. 論文標題 20世紀前半のモンゴルの宣伝ポスターにおける日本イメージ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Mongolian and Northeast Asian Studies	6. 最初と最後の頁 81-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Kamimura Akira
2. 発表標題 Hybridity and Vitality of Culture: Mongolian Traditional Performing Arts during the Covid-19 Pandemic
3. 学会等名 International Symposium "Mongolia and Japan: From the Dynamism of Eurasia" (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 上村明
2. 発表標題 新型コロナウイルス感染症のモンゴル国の移動牧畜への影響を考える
3. 学会等名 日本モンゴル学会2022年度秋季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上村明
2. 発表標題 モンゴル国西部の牧畜環境・移動・家畜管理・日帰り放牧
3. 学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「チベット・ヒマラヤ牧畜文化論の構築 民俗語彙の体系的比較にもとづいて」研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kamimura Akira
2. 発表標題 Hybridity and Vitality of Culture: Mongolian Traditional Performing Arts during the Covid-19 Pandemic
3. 学会等名 International Symposium "Mongolia and Japan: From the Dynamism of Eurasia" (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上村明
2. 発表標題 新型コロナウイルス感染症のモンゴル国の移動牧畜への影響を考える
3. 学会等名 日本モンゴル学会秋季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 “ ” (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 KAMIMURA Akira
2. 発表標題 "Belcheer ezemshuuleh" tuhai onol ba praktik
3. 学会等名 Mongolyn ugsaatan sudlal-2020: Erdem shinjilgeenii hural (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上村明
2. 発表標題 創造と模倣 モンゴルHipHopの成り立ち
3. 学会等名 日本モンゴル学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kamimura, Akira
2. 発表標題 1912 ony "Altain urianhaig zahiragch Baruun garyn bugdiin darga Baldandorjiin bichig"-iin tuhai
3. 学会等名 Legacy of Mongolian Source Documents (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kamimura, Akira
2. 発表標題 Tusheet han aimgiin Dondad hoshuuny nutgiin zurgan deerh "Ih huree"
3. 学会等名 Kyakhta and Khuriye: From the Viewpoints of Eurasia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kamimura, Akira
2. 発表標題 Review of Land Reform and Development Programs in the Pastoral Sector in Post-Socialist Mongolia
3. 学会等名 Asian Seminar of the International Association for Mongolian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上村明
2. 発表標題 二重のプリコラージュ: モンゴル・ヒップホップの作り方
3. 学会等名 科研費基盤研究(B)「モンゴルをとりまくエスノスケープとアイデンティティの重層的動態に関する実証的研究」第2回公開研究会「モンゴル・ヒップホップをめぐるエスノスケープの現在」(招待講演)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 上村明
2. 発表標題 アルタイの山の主に捧げる：叙事詩の声の技法とその広がり
3. 学会等名 説話・伝承学会 2018年度秋季大会、シンポジウム「中央ユーラシアの英雄叙事詩：伝承と伝承者」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KAMIMURA, Akira
2. 発表標題 Aimag, Hoshuu Nutgiin Zurag Uildeh Chin Ulsyn Zarlig, Durem ba Mongolchuudyn Oroltsoo
3. 学会等名 Mongolian Maps and Toponymy (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上村明
2. 発表標題 VISUAL IMAGES OF THE JAPANESE IN MONGOLIA (First Half of the 20th Century)
3. 学会等名 ユーラシアにおける日本とモンゴル（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上村明
2. 発表標題 エスニック境界を越える牧畜民の協力-モンゴル国西部におけるその歴史・制度・生態
3. 学会等名 生態人類学会23回研究大会
4. 発表年 2018年



1. 著者名 フスレ、田中克彦、チョイラルジャブ、二木博史、ドジョーギーン・ツェデブ、ビルタラン・アグネシュ、藤井真湖、上村明	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 -
3. 書名 ユーラシア草原を生きるモンゴル英雄叙事詩	

1. 著者名 荻原眞子、福田晃、金贄會、百田弥栄子、坂井弘紀、上村明、三宅伸一郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 三弥井書店	5. 総ページ数 346
3. 書名 英雄叙事詩	

〔産業財産権〕

〔その他〕

MONGOLIAN MANUSCRIPT MAP PROJECTS <a href="https://mongol.tufs.ac.jp/">https://mongol.tufs.ac.jp/</a> 業績一覧 <a href="http://mongol.tufs.ac.jp/kamimura/">mongol.tufs.ac.jp/kamimura/</a> 研究業績一覧 <a href="http://mongol.tufs.ac.jp/kamimura/">http://mongol.tufs.ac.jp/kamimura/</a> 研究業績一覧 <a href="http://mongol.tufs.ac.jp/kamimura/">http://mongol.tufs.ac.jp/kamimura/</a>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------